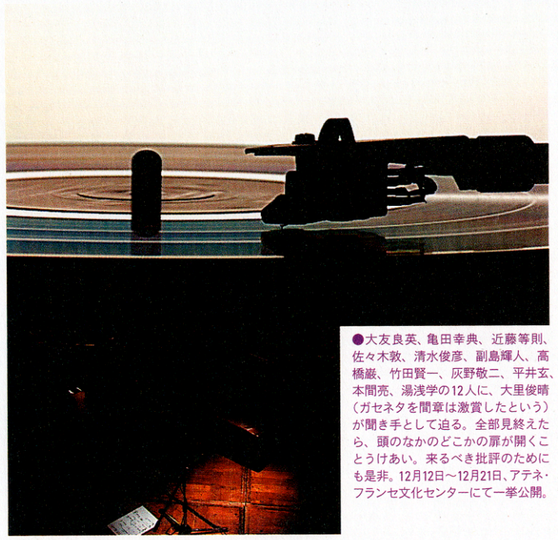
青山真治『AA』
〈廃墟〉としての間章

文＝南部真里

個人的な書き出しをお許し下さい。70年代、ジャズ喫茶に通いつめた学生が薄暗がりでむさぼるように読んだのと同じく、90年代に学生だった俺も間章に心酔していた時期があった。フリージャズや即興音楽には当時すでに「ロマン」という言葉で代替できるノスタルジーがあったし、遅れてきた者特有の憧憬と間に合わなかった痛痒のなかで間章の修辞関係が複雑で小難しい漢字が並んだ文章を、意味がわからないまま（大友良英も作中、同様の発言をしている）理解したふりをして、法政大のロックスオフに在籍していた弟にしたり顔で語っていた、いま考えると赤面ものの過去がある。たぶん、多くの人がそうであるように、ときが経つまま、間章（と古き良き前衛）へ向けた情熱は順調に記憶に回収され、映像でその存在が仄めかされていた『ユリイカ』を見るまで、封緘されたままだった。

本作は、『ユリイカ』の青山真治監督による、7時間30分にもおよぶ長編ドキュメントだ。生前に親交をもった者、著作から影響を受けた者、間章がオーガナイズしたコンサートに関わった者、都合12人の発言を干渉させることで、〈間章〉的なる思考と行動とはなにか、モアレ状に浮上させる試みになっている。見る者の目を開かせるのは間章の〈非時〉の思考。普遍性と単純に読み替えることができないこのタームは「あらかじめの喪失」（佐々木敦）からはじまらざるを得ない00年代の音楽批評や、岸野雄一がこれまで繰り返し指摘してきた「作品と批評の独立」、湯浅学の言う「批評の記名性」を裡に孕む概念で、「あのころのフリージャズといまのフリージャズは違う」（副島輝人）という世代間の断絶を逆照射する問題意識の在り方だろう。さらに、灰野敬二や近藤等則、〈自由空間〉に参加した本間亮／亀田幸典が語る、野放図とも実直ともうつる行動者＝間章を重ね、止揚させることで本作のテーマは完奏される。しかしこれは、著書にあたったことがあるか、映像中に散りばめられている固有名詞（ベイリー、レイシー、ミルフォードらのジャズマンや『JAZZ』や『morgue』『ROCK MAGAZINE』といった雑誌まで）を知っているか、を問わない。なぜなら、不在文学のように、ウワサ話のように、もしかしたら口コミのように、12人の発言が外堀を埋めることで、『AA』を見終えた観客の網膜には間章の姿が像を結ぶからだ。ここで立ち上がるのは〈廃墟〉としての間章だ。遺産は観光地化され保存されることで延命するが、廃墟はフロイトの言う「不気味なもの」を身に纏い、朽ちることで存在感を誇示する。ためらわずに足を踏み入れれば、私たちは、かつてそこにあったものを想像力で補完することができるはずだ。

映画は灰野敬二が演奏するガット・ギターのインプロヴィゼーションで幕を開ける。ライヴが収録された法政大学学館もいまはもう存在しない。本作はつまり、複数の廃墟をめぐる物語でもある。



●大友良英、亀田幸典、近藤等則、佐々木敦、清水俊彦、副島輝人、高橋巌、竹田賢一、灰野敬二、平井玄、本間亮、湯浅学の12人に、大里俊晴（ガセネタを間章は激賞したという）が聞き手として迫る。全部見終えたら、頭のなかのどこかの扉が開くことうけあい。来るべき批評のためにも是非。12月12日〜12月21日、アテネ・フランセ文化センターにて一挙公開。